

死者と生者が結ばれるとき 救済観からみるキリスト教

嶋内博愛・早稲田大学人間科学部助手

一 ジャック・オ・ランタンとは何か

十月三十一日晩を英語で「ハローウィン」という。この日に英国や合衆国で行われる年中行事につきものの、「目鼻口をくり抜いたオレンジ色のカボチャ」の造形オウツェを知る人は、最近では日本にも少なくないだろう。しかしそのカボチャがジャック・オ・ランタン (Jack-o'-lantern)「ランタンのジャック」の意)という名を持ち、ハローウィンなる語が、翌十一月一日の諸聖人の祝日ハロウに由来することについては、とれだけ知られているだろうか。ハローウィンとは、ヘオール・ハロウ・イヴン (All-Hallow-Even)「オール・ハロウのイヴ、諸聖人の祝日の前夜」の短縮表現²⁾であり、この名称を見る限りにおいては、諸聖人の祝日の前夜祭といった意味合いが読みとれる。

では、ジャック・オ・ランタンとはそもそも何なのか。その系譜について確認することから始めよう。さまざまなヴァリエーションの起源説明が知られているが、たとえばアイルラン

ドには、ジャックという悪漢の話が伝わっている。彼は生前悪魔をやりこめたせいで、死後天国から門前払いを食っただけでなく、地獄への入場をも拒絶されたというのだ。伝承の最後の部分だけみてみよう。

ジャックは、むさ苦しい生活にまた戻った。しかし、次のハローウィンが来る前に、彼は体が弱り切って、死んだ。彼は天国の門を入ろうとしたが、むさ苦しい生活だったために、追い返された。そこで、地獄の門へ行った。悪魔は、俺はけっしてお前の邪魔をしないと約束したのだからと言って、彼を突き返し、もとの所へ帰れと言った。ジャックが暗闇で道を探すのを援けるために、悪魔は、地獄から石炭を一個投げた。ジャックは、それを燕の中へ入れた。それはジャック・オ・ランタンになり、それからずっと永遠に地上を彷徨うジャックの灯火となった。³⁾

永遠にこの世に緊留され続け、燃えるランタンを手に地上を彷徨い続けなければならないジャック。つまり、ジャック・オ・ランタンの正体とは、いわば幽霊なのである。しかし、この話のテーマを「地表近くを浮遊する怪しげな炎に関する説明譚」と読み替えてやれば、それは決してアイルランドだけに特徴的なものではないことも容易に想像がつくだろう。「浮遊する炎」にまつわる伝承は、ヨーロッパのみならず、おそらくは汎世界的に分布していると推定でき、日本語でいえば「鬼火」あるいは「狐火」に相当する。

少し大きめの英語辞典を参照すると、じつは、ジャック・オ・ランタンに関する説明項目の最後の方に、「狐火のこと」という一文を見つけることができる。この現象の名として、英語では一般的にはウィル・オ・ザ・ウィスプ (will o' the wisp)「藁束のウィル」の意) が用いられるが、ラテン語にその源を持つイグニス・フテユウス (Ignis Fatuus) が使われることもある。イグニス・フテユウスなる語も元を辿れば、「愚かな」(Fatuus)「火」(Ignis)を意味し、ドイツ語での狐火に対する一般的な名称であるイルリヒト (Irrlicht)「迷い火」の意)も、「愚かな火」からの直訳だろうと推測されている。フランス語やイタリア語でも、一般的にはそれぞれフ・フォレ (feu follet)「狂った火」の意)、フオコ・フアトゥオ (fuoco fatuo)「狂った火」の意)と呼ばれ、これらの表現もラテン語同様の構図が見えることから、おそらくは、狐火に対する西欧の諸言語の名称は、ラテン語から各国語に翻訳・導入されていったのではないだろうか。

いうまでもなくラテン語は、二〇世紀初頭までカトリック教会の公用語であり、母語としての話し手が皆無であるにもかかわらず、西欧文化のなかでは突出した位置を占めていた言語だ。それゆえ、狐火の名称にこんなにも色濃いうラテン語の影響が見られるという事実は、狐火という現象を知覚した際に採用された説明原理の来歴を語っていると考えても、あながち的はずれではないだろう。つまり、ラテン語使用者、より正確を期して言えばカトリック教会の聖職者が、空中を浮遊する怪火現象を現実から切り出し、命名した張本人だったのではないか。筆者はそう推測する。

二 燃える人と煉獄

とはいえ、民俗語彙では狐火の名称は多様な広がりを見せている。たとえば南ドイツやスイスではしばしば浮遊する炎は人間の形をとるとされ、「燃える人」^{ブライツマン}と呼ばれる。ドイツ語圏では十九世紀以来盛んに収集された各地の伝承集に、燃える人に関する伝承が散見できる。幽霊とも妖怪とも形容されるこの怪しげな人物は、姿はたしかに人間だが、全身が赤々と燃えており、夜になると人気の少ないところに、すなわち異界との境界領域にあくがれであるという。欄外カコミに示した、ポーランド南部のシロンスク地方で二〇世紀初頭に採集された類話はその一例だ(次頁カコミ参照)。

燃える人の場合も、アイルランドのころ、つきジャックのなれの果てと同様、浮遊する炎となって死後地上を彷徨っているが、

プレスラウの燃える人の話

この地方では、燃える人は一般的には狐火と同じように人間に対して悪さばかりする妖怪と見なされるが、たった一度だけ善行をしたという。

プレスラウ（現ポーランドのウロツワフ）の南西には、今ではツオプテン（Zobten）を越えてシュヴァイドニツ（現スヴィドニツァ）方面に向かう舗装道路がのびているが、十八世紀にはひどい道だった。とくに、クラインブルク（Kleinburg）とクライン・リンツ（Klein-Linz）の間の村々を通る道はすさまじかった。これらの村々を通る道は不吉といわれるが、その原因は、そこを通る車屋たちの口から出た、おびただしい数の悪罵が招いているのかもしれない。たとえば、シュレジエン（現シロンスク）地方の言い回しで、「すべてが呪われてしまう」という悪罵である。たった一マイル（約七・五キロメートル）の距離なのに、悪路のためときに二日もかかることもあるからだ。

ある霧のかかったじめじめと冷たい十一月の晩のこと。シュヴァイドニツのある車屋が、石灰と石臼を積んだ三頭立ての荷車を三台牽いて、プレスラウへ向かっていた。途中、この「不吉な区間」にさしかかったとき、突然、夕闇の中で何者かが彼に襲いかかってきた。彼はこれまでにそのような目にあつたことはなかつたが、今回ばかりは車軸までぬかるみにはまってしまった。それはまるで地面が落ち込んでしまったかのようにだった。明らかにそれは夢などではなく、彼はたちの悪い妖怪に出会ってしまったのだ。やがてあたりは真つ暗になり、三歩先も見えなくなってしまった。もはやこれ以上この場所にとどまることはできない、そんなことをしたら馬

が死んでしまう。彼は従者を呼び、テコと巻き上げ機を使って持ち上げるよう指示した。しかしすでにあたりは真つ暗。手元が滑り、うまくいかない。これ以上何の手だてもないことを、彼らは悟った。近くの村からランタンと助けを求めるのも無理だった。というのも、彼らのうち誰も、自分たちがいつたどこににいるのか言うことができなかつたからである。とうとう車屋の口から、罵り言葉が飛び出した。だがしかし、それがなんになつただろう！ 彼は大声で嘆き、叫んだ。「ああ、燃える人が来てくれたらなあ。あの、呪われた化け物が。現れて私たちを照らしてくれ！」

従者はこの罵言に仰天した。わずか三秒後、彼らの前には燃える人がいた。まるで地面からよきよきと生えてきたかのように。燃える人は小さく体をゆすつており、火の粉が飛び散っていた。車屋もこれにはびくりしたが、それでもすぐに気を取り直し、従者を呼び、遠くまで照らす明かりを用いて荷車を持ち上げるよう指示した。彼らは何も言わず、主人の言葉に従つた。全員が作業に取りかかり、いくばくかの苦勞の後、ようやく荷車は再び前進し始めた。誰もが押し黙つたままだったので、聞こえるのは道を行く荷車の音と、地表をざわざわと鳴る風の音ばかり。燃える人はつねに一番照らしてほしい場所に移動し、進み始めた荷車に付き従つた。荷車が安全なところまでくると、燃える人は奇妙にも空高く跳び上がった。それはまるで子供が喜んでゐるかのようだった。あたかも神の祝福が与えられたかのごとく、作業は早く運び、荷車はとうとう石畳の上に戻され、先に進むことができるようになった。馬の驚異的な本能も、前進を後押しした。しかし、こつなると、従者は燃える人に対しての支払いが心配になつてきた。だが、主人は冷静で、馬たちも、普段は何か変わったことが起こるとすぐに脂汗を流し身震いし

だすにもかかわらず、このときはまったく恐怖の色を見せていなかった。燃える人は先頭車両の前に立ちほだかり、褒美を待っていた。車屋は、いつもはぶつきらぼうな男だったが、このときはかりは気の利いたことを言った。「燃える人よ。私はあなたを罵り言葉で呼びだした。というのも、あなたがサタンの側にいると思っていただけだ。しかし、あなたはあなたも善き精霊であるかのごとく手助けしてくれた。もしかして、あなたは罪を浄めるために追放されていたのではないか。金銀はあなたには何の価値もないだろうし、實際、あげようにも持ちあわせがない。もしかして、私がこんなふうと言ったらあなたの役に立つだろうか。あなたの善き行いに対し、父なる神が、息子なる神が、三位一体なる神が報いますように。そしてあなたが赦免に預かり、永遠の至福へと至りますように。アーメン」

燃える人は地面に崩れ落ち、天に向かつて炎を噴き出し、静かにこう言った。「三つの聖なる名の元に、あなたに礼を言う。あなたがアーメンといってくれるまで私には禁じられていた、その名を唱えることが。もう五百年間も燃えながら彷徨い続け、もはや昇天できないかと思っていた。私はかつてこの土地の騎士だったが、生前は悪人だった。すべての聖人や尊師さまたちを冒瀆してしまった。(中略)しかし、あなたが私を解放してくれた。神は必ずやあの世であなただけに報いるだろう。(後略)

* i Kuhnau, Richard: Breslauer Sagen, Breslau, Ostld. Verl. Anst., 1926, S.152-157, Nr.97.

一点大きく違つところがある。それは、場合によっては、「彼は煉獄で罪を浄める咎人である」という説明が付加される点だ。ここに紹介した燃える人の場合、車屋が気を利かせてくれたおかげで、五百年に及ぶ業火の苦しみから解放されることでできたと記されており、苦しみの最中でさえ、天国へと到る一抹の期待があったことがわかる。

ジャックの場合、生前の悪行が死後の生に影響を及ぼし、悪行を行った場所(＝地上)を彷徨い続けなければならないという部分については同じだ。しかし、燃える人とは異なり、救われる可能性については一切描かれぬ。ジャックは永遠に彷徨い続けなければならないのである。彼は地獄からも拒否され、永遠にキリスト教の枠組みからは拒絶された忌まわしき存在と

して断罪されており、救済への余地は一切ない。

つまり、燃える人伝承の背景には、救済への望みが託されているとも読める。とはいえ、罪滅ぼしのために死後いくら善行を積んでもそれだけでは昇天はかなわない。天国の門は、咎人のために神へのとりなしの祈りを生者が捧げること初めて開かれるという暗黙の了解が、ここには見え隠れしているのである。とりなしの祈りとは何か。それがどのようにキリスト教に採用されていったかについて考えるためには、ふたたびハローウィンに戻らなければならない。

三 黄金伝説における諸聖人の祝日と死者の日

ハローウィンの語源の「オール・ハロウ」すなわち「諸聖人

の祝日」とは、殉教したすべての聖人を祀るための祭日で、六〇九年に時の教皇ボニファティウス四世がローマのパンテオンをキリスト教の教会に変更し、それを聖母マリアと殉教者に捧げたのが起源とされる。祭日が制定された理由については、『黄金伝説』中に詳しく、その第一五五章冒頭には、導入の第一の理由として「異教の神殿をキリスト教の聖堂として奉獻するた^め」とある。つまり、アニミズムの信仰世界に暮らす人々に対し、唯一絶対神への信仰を広める拠点を築き、布教するのが、キリスト教側のもくろみだったと読み替えることができるのである。

諸聖人の祝日の翌日は、一般に「死者の日」と呼ばれ、キリスト教徒、とりわけカトリック教徒にとっては諸聖人の祝日と並んで重要な祭日となっている。死者の魂が遺族の元へ帰ってくる^とされる日であるため、日本では便宜的に「ヨーロッパのお盆」などと単純化して紹介されることもある。

しかし面妖なことに、今日なおカトリック信者の間で広く祝われている年中行事であるにもかかわらず、聖書には死者の日については全く記述がないのである。死者の日どころか、まっとうな死者が生者の暮らす世界に再来して生者に接触してくるなどという記載は、聖書のどこにも見あたらず、もし死者が出現するならば、それは悪魔の仕業でしかないのである。ましてや死者が生者を守護することなどありえない。こうしたずれはいかなる事実を反映するのだろうか。

初期中世におけるキリスト教は、祖先が後裔を守護するとい

う発想の枠組みを持ち合わせておらず、いやむしろそれを一刀両断に否定していた。たとえば五世紀にキリスト教の信仰を弁証法で合理化しようとした教父アウグスティヌスは、当時の人々が行っていた「異教的な」儀礼行為である祖先崇拜を断固として拒否する。ここから読みとるべきは、たとえ祖先といえども一度生者の世界を去ったならば、以後二度と生者と直接接点をもつはずはないという、キリスト教側の論理である。

にもかかわらず、なにゆえ死者の記念日が設定されたのか。アウグスティヌスがあげて拒否しなければならなかったことを考慮すれば、容易に解答を引き出すことができるが、教父の言説に戻る前に、『黄金伝説』のなかにそのヒントを見ておこう。ウオラギネは、この日がキリスト教暦に導入された経緯についても記している。第一五六章「奉教諸死者の記念」がそれで、死者のための記念日は、元を辿ればクリュニー修道院の院長オデュロンが九九八年に取り入れたものであったという。祝日の導入当時、死者への追悼ミサは同修道院内だけであげられていたが、次第に修道院の外部にも反響を呼びおこし、やがて当時の西欧キリスト教社会に波及していった。導入のきっかけは、修道院長オデュロンの幻視体験が元になっていると、ウオラギネは以下のように書いている。

ペトルス・タミア¹によると、クリュニーの大修道院

長オデュロンは、施物や祈りによって死者の魂が自らの手から奪われていくと嘆く悪魔どものうめき声を、シチリア

島のエトナ火山の近くで聞いた。そこで、傘下の修道院で諸聖人の祝日の翌日に奉教諸死者の記念日をおこなうように命じた。その後、全キリスト教会がこれを踏襲するようになったのだという。¹³

『黄金伝説』は、いわば中世における宗教的(『民衆本』)の性格を備えていたとされるとはいえず、ここに描かれた死者の世界に関する逸話がどの程度一般信者に浸透していたかは、もちろん擱かなければならない。しかしたえそうであるとしても、死者が滞留する場が、生者の世界と同一平面上の某所にあると、少なくとも布教する側がみていたことはわかる。オテュロンの幻視は、おそらくは彼が個人的に「体験した」ものにすぎなかっただろうが、それが語られ、こうした形でテキスト化されたところをみると、死者に対する施物や祈りを追認する契機を、現実的に布教の現場にあつたキリスト教の聖職者たちが求めており、彼らをとりもつネットワークを伝つて、修道院長が見た幻視に関する言説がウオラギネまで到達したであろうことが想定できる。さらには、「施物や祈りが人を悪魔の魔手から救つ」という幻視が示す他界観は、その後拡大解釈され、祈りの効果について強調する際の根拠ともなつていったのである。

四 祈る人と祈られる人の構図

聖書は死者と生者の接点について語らないばかりか、最後の審判を受ける終末の時がいっさいつ起こるのかについても寡

黙である。聖書の記述に忠実に従えば、人が死に、埋葬されると、その人はこの世の終わりのその時までの永い時間を、黙つて地の下で待ち続けなければならないことになってしまう。人は死んだらどこに行くのか。この永遠の問いかけに解答するのが宗教の存在理由のひとつといえるにもかかわらず、聖書はそれに明確な解答を提供しない。それゆえ、ここに後代のキリスト教聖職者が独自の解釈を加えていく余地があつたのである。

たとえば前述の教父アウグスティヌス。たしかに彼は祖先崇拜を否定したが、じつは、死者にまつわる祈りそのものを否定したわけではなかつた。死者への祈りは無意味だが、キリスト教徒として、死んでしまった者のために、ミサをあげ、祈禱し、施すのは生者の勤めだ、と主張しているのである。¹⁴ むしろ、拒否される対象¹⁵が多かれ少なかれすでに実体化していなければならぬ。つまり、死者は祖先への崇拜を、アウグスティヌスがあえて拒否すると明言した姿勢から、当時いかに祖先崇拜が一般的に行われていたか、読みとることができるのである。キリスト教の聖職者コミュニティーは、教義解釈を発展させ、死者の日を導入することで、祖先崇拜する人々を自らの体系の中に取り込もうともくろみ、そしてそれに成功した。¹⁵

「異教徒は死者に祈り、キリスト教徒は死者のために祈つた」。¹⁵ サロモン・レナックのこの言葉には、異教的な儀礼とキリスト教的なそれとの違いが端的に表れている。とはいえず、祖先崇拜の枠組みのなかでは、祈る対象は、あくまでも祈る人物が生前縁故をもつた故人に限られ、不特定多数の死者に対して捧げら

れたのではなかった点は注目しておいた方がよい。

さて、「死者のために祈る」という構図が採用された場合、祈りは直接死者には届かない。祈りを送る生者と祈りを受け取る死者の間に、両者を取り持つなものかが不可欠になってくる。仲介者とは誰か。端的に言ってしまうと、キリスト教そのものにはかならない。架け橋が具体的にどのよう機能していたかについて示す逸話が、ベトルス・ダミアーン(前述)の著作といわれる『さまざまなる霊出現と奇跡について』にみられる。聖母への祈りが贖罪中の死者を死後の苦しみから救うという話だ。

場所はローマ、時は聖母マリア昇天の祝日(八月十五日)の夜、人々が市内の教会で祈りを唱えている真つ最中のこと。サント・マリア・イン・カンピテルロ大聖堂での聖母マリアの禮拜に参列したある女が、一年ほど前に死んだはずの代母マロジアを見かけ、たまたま声をかけると、彼女は死んだ後、罰を受けていたことを語りだした。その部分を見てみよう。

マロジアは言った。「今日まで私は軽くない罰を受けるために自由を奪われておりました。(中略)けれども今日は、世の女王マリアさまが私どものために津々浦々に祈りを溢れさせてくださり、私を懲罰の場から解き放つてくださいました。今日、おとりなしによって苦業から救い出されたものの数はおびただしく、ローマの人口をしのぐほどです。だから私も、こんなにも大きい恩恵に対してお礼を申

し上げるために、栄光のマリアさまに捧げられた聖所を訪れているのです」。

聖母昇天の祝日に信者たちが唱える祈りの言葉が聖母に届き、その結果聖母から恩寵が下り、それが、マロジアのみならず「おびただしい数の」人々、つまりは同じ神を信仰する不特定多数の同胞たちを、苦業から救ったことが描かれている。そしてそれは、祈りを捧げ、代母を目撃した「ある女」もまた、死後は罰を受けなければならないことを暗示し、彼女が劫罰から解放され天国へと到るためには、同胞の祈りが必要とするという構図をも同時に物語っている。こうして、かつて祖先崇拜の枠組みにあつて自らの祖先のみに捧げられた祈りが、宗教共同体を介して、不特定多数へと届き、不特定多数から届くようになったのである。

五 聖書解釈の拡大、宗教改革、反宗教改革

キリストや彼の使徒たちが、「神の言葉」を実際に布教していた頃の記憶が薄れ、初期キリスト教の時代から時を経るに従い、聖書に依拠しない主張はさらに拡大解釈されていく。アウグスティヌスから六百年後の十一世紀には、ついに煉獄という天国の前庭、つまり浄化の場が誕生する。これは同時に、死後の世界への時間軸の導入を意味した。死後赴く浄化の場での滞在期間は、一律ではない。浄罪が完了し、昇天できるまでに要した時間は、プレスラウの燃える人は五百年間、代母マロジアは一

年間。生前の行いや生者からのとりなしが、苦しみの期間を左右するとう考え方を、煉獄の誕生はともなっていたのである。しかし、宗教改革の波が巻き起こったとき、聖書に明示的な記載がないことから、プロテスタントは煉獄の存在を否定した。あるいはイングランドでは、国王ヘンリ八世の政治的判断からカトリック陣営を離脱し、英国国教会を創立、国王自らがその首長となった。ジャック・オ・ランタンが燃える人とは異なり、永遠に昇天できないのは、あるいは、こうしたプロテスタントの発想が混入していることに起因するのかもしれない。

いずれにしても、反宗教改革サイドすなわちカトリックは、プロテスタントとの差別化を図るために、あえて敵が拒否した儀礼・典礼あるいは教会建築内の華美な装飾などを、その後積極的に利用していくことになる。利用された説明原理のうちのひとつが、死者のための祈りと死後の浄罪観念だった。たとえば、オーストリア南部、ケルンテン州の州都であるクララゲンフルト市の教区教会である聖エギット（St. Egid）教会の南側回廊には、いわゆる「哀れな魂（Armen Seelen）の祭壇」が配置されている（図1）。一七〇三年に設置されたこの祭壇の壁龕には、四体の哀れな魂たちが、めらめらと燃え上がる炎の中で熱さをじっと堪え忍び、救済の時を待ちつつ苦しむ姿が刻まれた像が置かれている。煉獄における浄罪と救済の物語が、ここには凝縮している。

類似の造形は置かれていなくても、カトリックの教会であれば、こうした目的のための喜捨箱は一般的にみられる。今日で

はその意味合いは小さく薄れてしまったが、本来は救いの代価としての喜捨であったはずだ。

死後煉獄の苦しみから、より確実かつより早く解放されるには、より多くを教会に寄進するのがもっとも早道であると説いた、中世末期の聖職者たち。煉獄、そして浄罪という観念が編み出されたことから、キリスト教は無関係な他者を、関係づけられた隣人へと変換するメカニズムを手中に収めたといえる。この連鎖は、煉獄の誕生から四世紀後におこるプロテスタントの運動と、救済観の再考に対峙したとき、カトリックという看



図1 「哀れな魂の祭壇」。下段に見える四体の半身像が、煉獄で焼かれる哀れな魂を表現している。（筆者撮影）

板を掲げてさらに強化されていくことになる。

人々の善意のきずなもまた、浄罪の鎖の延長線上にあるのではないか。つまり、憐れみの対象となっている貧者は、救われない魂の現実世界におけるメタファーとはなっていないだろうか。憐れみを受ける対象と憐れみを施す主体の関係は、施しという行為が遂行されている現場に区切れば一方通行的であるけれど、長期的視座に立つてみれば、いつかは施した人間が施され、総計でみれば慈善の収支は計算が合う。救いをめぐる問いかけはつきない。

いずれにせよ信徒たちは、浄罪というバトンを渡し続けるラウンナー仲間となり、死者から生者への贖罪のリレーは今なお続いている。「哀れな魂の祭壇」脇に置かれた「浄罪箱」にチャリンと小銭を入れる音は、次なる善意を巻き込んだ、その証である。

注

- * 1 プロテスタントでは「万聖節」とするのが一般的である。
- * 2 Oxford English Dictionary, 2nd edition, Jack-o-lantern の項。
- * 3 グイリー、ローズマリ・エレン(荒木正純・松田英監訳)『妖怪と精霊の事典』東京、青土社、一九九五年、二二二頁。
- * 4 これは自然界における特定の発火現象であるという、科学で裏打された説もある。たとえば角田義治「自然の怪異」東京、創樹社、一九九〇年。
- * 5 在位六〇八〜六二五年。
- * 6 最初は五月十三日が祝日とされていたが、教皇グレゴリウス三世(在位七二二〜七四一年)が暦日を十一月一日とした。すべてのキリス

ト教徒に対しこの祝日を祝うように布告が出されたのは、それから一世紀後の八三五年で、教皇グレゴリウス四世(在位八二七〜八四四年)の治世下だった。

- * 7 後にジェノヴァの大司教となるヤコブス・デ・ウオラギネ(一二三〇〜一二九八年、大司教在位一二九二〜一二九八)が一二六三〜一二七三年に編集した聖人伝集、聖人伝とは、キリスト教における聖人や殉教者たちの、言行や生涯を伝説化したものをいう。四世紀初頭、パレスティナのサマリア地方、カイサリアの司教エウセビオス(二六三頃〜三三九年)の『教会史』一〇巻をもって嚆矢とし、その後千年の時をかけて土着の信仰や異教の伝承を呑み込みつつ、成熟していったウオラギネは、十三世紀当時伝わっていた聖人伝を編集・集成したのである。

- * 8 ウオラギネ、ヤコブス・デ(前田敬作・山中知子訳)『黄金伝説(4)』京都、人文書院、一九八七年、一六〇頁。

- * 9 たとえば、筆者の知人(オーストリア人)は毎年この日には墓参を欠かさず、その際墓は花で飾られており、ロウソクには灯がともされる。

- * 10 アウグスティヌス『神の国』第八巻、第七章。

- * 11 公認は一〇〇六年、時の教皇ヨハネス十四世による。

- * 12 ラウエンナ出身で一〇六〇年頃枢機卿となった人物。当時すでに祈禱共同体だった隠修道士グループにおいて、死者を追悼する祈禱に大きく貢献したことで知られている。一〇六三年または一〇七二年に編まれたとされる『さまざまな亡霊出現と奇跡について(De diversis apparitionibus et miraculis)』は、彼の著作とされる。

- * 13 ウオラギネ、前掲書、一八一頁。

- * 14 この記載があるのは、アウグスティヌス『死者のための供養について(De cura gerenda pro mortuis)』。ここではル・コッフ、ジャック(渡辺香根夫・内田洋訳)『煉獄の誕生』東京、法政大学出版局、一九八八年、一一九〜一二〇頁を参照した。

- * 15 Reinach, Salomon: De l'origine des prières pour les morts, In: Revue

des Etudes juives, 41 (1900), p.164.

* 16 ル・ゴッフ、前掲書、二六五―二六六頁より引用。原文は第二部第三四編にある。

* 17 「実際、煉獄というものは時間の中にあるのであり、時の法則に従っている。マール、エミール(田中仁彦他訳)『ゴシックの図像学(下)』国書刊行会、東京、一九九八年、一三三八頁。

* 18 聖エギッド教会はクラゲンフルト最古の教会で、すでに一二五五年の記録にみられる。現在ある建物は華やかなバロック様式のため、一見しただけではそれほど伝統ある教会のように見えませんが、じつはこの地域一帯は十六世紀末から十七世紀末にかけて数度にわたり大

震災に見舞われている。教会堂自体は一九九〇年十二月四日の地震で壊滅的な被害を受けたが、のちに現在見られるように全面修復されている。

* 19 祭壇のメインである十字架祭壇の中央には磔刑像、左右にはマリヤと洗礼者ヨハネの像がそれぞれ配置されている。しかしこれは十八世紀当時からあつたわけではなく、十九世紀後半に交換されたものである。作者は、隣州シュタイアーマルクの州都グラーツの彫刻作家ヤーコフ・クシエル(Jakob Gschiel)とされる。

* 20 ただし、四体のうち二体は盗難にあつたために作り直された。しかしそれがどれなのかについては、記録がないためはつきりしない。